

## 木本好信編

### 『古代の東北——歴史と民俗——』

高橋 富雄

木本好信編『古代の東北——歴史と民俗——』が刊行されて、次の十五編を収めている。

柵戸の風俗的意義（新野直吉）、勿来関について（志田詢二）、古代における「北方」について（熊田亮介）、位階制の一断章——斉明紀における蝦夷叙位記事をめぐる——（荊木美行）、渡島蝦夷の朝貢と交易（中村英重）、『類聚国史』『風俗部』における「蝦夷」と「俘囚」（中村光一）、藤原緒嗣の蝦夷施策（木本好信）、古代東北と舟運（森田悌）、征夷と造都略年表（福井俊彦）、天道念仏と出羽三山信仰——千葉県八千代市高津の神仏分離——（大石理子）、椿の伝承（小池淳一）、歌枕へあこやの松——をめぐる在地伝承（菊地仁）、『関白秀次物語』のこと（松原一義）

ここには、わたくしが存じ上げている方も何人かおられる。しかし大体はわたくしにとっては、全くの新進である。わたくしなどこの旅に出で立ったときは、「この道や行く人なしに秋の暮」という感が強かった。それが今こうして、十四人ものかたがたの新しい感覚での古代東北史論である。「笈も太刀も五月にかざれ紙幟」。芭蕉の奥の細道の旅にあや

かって、歴史奥の細道に新しい道標を打ち立てられて成果を、まずそのようにたたえておきたい。

この企画の新しいさは、個別研究において新生面を開いていることはもちろんであるが、それよりも「歴史と民俗」と副題しているように、東北古代の理解に、史学研究の方法とともに民俗学的な文化史学の方法を導入して、そのドッキングをはかっている点にある。

わたくしなど、東北のことをコツコツやって痛感したことは、ここでは歴史は歴史、文学は文学、仏像は仏像というふうに、それぞれに分化しているのになしに総合されるように共同作業に組み合わされていないと、道の奥という未知の奥にはなかなか至り得ないという歎声だった。それが今、歴史とをもって深い関係にある民俗と一部文学との連帯のものと東北史に具体的な道を開いたことは、方法の上での新機軸ということができる。

ただそのために、できれば、これは歴史、これは民俗、これは文学というふうにはっきり分かれる扱いとともに、主たる柱に立てられている歴史プロバラーのテーマの中でも、そのような民俗とか生活・宗教などのような、歴史の根底にあるものから歴史を論じるようなものもあつてよかったのではないかとおもった。

わたくしが深く敬意を表するのは、ここにおけるテーマ設定・問題提起の新鮮さである。「柵戸の風俗」を問題にするような研究はこれまでなかった。「古代における北方観念」。これも新しい。「東」から区別された「北」を論じて、北をみちのくに見る論など、新しい問題提起である。渡島蝦夷について朝貢と交易を論じ、古代東北の商業世界・舟運

を考えるなど、発想が一気に若がえっている。古代東北をいつまでも、問題の未知に閉じ込めて、展開を封じこめていたような状況から、まるで中世・近世まで門を開くように古代東北を構成しようとする意欲をそこに見るのである。

勿来関や『類聚国史』風俗部、藤原緒嗣。わたくしなども、いささか論及したことがある。今ここにきて、さらに大きく補われ、整理されて、格段の進歩がはかられた。征夷と造都の略年表は有益である。新撰日本紀略と評してよい。天道念仏。全く新しい問題の提示である。椿の伝承は、歴史が聞く民俗探訪として興味深いし、歌枕を在地伝承からとらえ直すところも注目される。できれば実方中将の本格物語との総合考察にしてはしかった。関白秀次まで降ると、古代としては少しのび過ぎた感があるが、この論考は本格的に構えられている。できればもう少し読めるように構成すると、このテーマがより生きたかもしれない。

わたくしは、学問も伝統を後生大事に守るだけでは、時代に取り残されてしまうが、さりとて新しがりやではなおいけないとおもう。この本は東北古代史について、どれだけ新しくなり得るかを、それぞれの形で示した基準の書として、推奨できるものである。

（高科書店刊 平成元年 四六版 二六〇頁 二四〇〇円）

（盛岡大学文学部教授）